

特別分科会①【高大接続】

持続可能な社会の創り手の育成につながる高大接続 ～国際比較から見える可能性～

〔報告者〕 花井 渉（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授）

〔報告者〕 細尾 萌子（立命館大学 文学部 准教授）

〔コーディネーター〕 山本 以和子（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

「令和の日本型学校教育」答申（2021）で示された「持続可能な社会の創り手」に向けて、学習者の資質・能力を高校・大学にて育むために今後の高大接続（入試や接続教育等）をどう企図すべきか。視野を拡げて英仏の場合、大学教育の準備性（レディネス）を高校までにいかに育てており、それが大学や社会に実際につながっているのかを見てみる。海外事例との比較から日本の高大接続の特徴に気づき、その理解より今後の高大接続を探る。

概 略

第1部のシンポジウムの話題の中では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力の方向に合わせて、教師・生徒の学びの変化や学校教育の方向性が示された。そこには、学校教育の改革だけに留まらず、グローバル化と学習の個性化が進行された社会と併行するように、大学キャンパスの多様化と、またその実現のためには、従来の受験に動機づけられ、かつ狭義な試験対策的な学力を測定する大学入試だけに固執しない選抜設計が示唆された。まさに、最近ではペーパーテストに留まらないスクーリング形式テストや、ポートフォリオや探究学習が評価される入試が出現している。これまでわが国で展開していた高大接続システムが本当に妥当なのかという大きなテーマも内在しながら、このたびは視点を拡げて海外の接続システムと接続評価をプラクティスするために、本分科会では、英仏の高大接続について報告を行った。

事例報告1では、イギリスの高大接続システムにおける近年の改革動向とそこでの公平性をめぐる論議について報告された。イギリスでは多面的な評価に基づく高大接続システムを目指した改革が度々提言されてきたが「黄金のスタンダード」としてのGCE-Aレベル優位および学力重視の制度が維持されてきたことが報告された。日本の高大接続においても、多面的・総合的評価が注目されているが、公平性の観点からは学力試験を通じた入学者選抜の実施とともに、試験の採点期間や人員を十分に確保するための制度改革が求められることが提言された。

事例報告2では、フランスにおいて、市民として育みたい力に向けた接続システムが形成されていることを報告した。大学入学資格試験のバカロレア試験で問われる、知識を構造化して表現する力は、大学や社会で必要とされる力とつながっており、小中高ではこのバカロレア試験で問われる力を段階的に育成していると述べた。日本の高大接続においても、記述式問題などの方法論だけを議論するのではなく、どのような人を育てたいか、その準備学力として入試でどのような力を問うべきかを検討した上で、それを測れる試験方法を開発すべきだと提言した。

全体討論の内容

国内では、時間をかけて聞くことができない英仏の高大接続についての報告であったので、活発な質疑応答が行われた。例えば「日本の大学入試システムは世界的に見ると、変わっていると聞くが、本当か?」「英仏の高等教育資格試験は何回受験可能か?」「高卒者だけでなく、社会人の大学受入となると接続面はどのようなになっているのか?」「英仏は教育システムが構造化されて世界で認められているのか? 大学進学率は低いのでは? 英国（ブレア政権）は職業教育の政策改革をしていたようだがどうなったのか?」の質疑を時間超過して行った。その後「日本の高大接続の課題は何か? ⇒その課題が解決しそうな知見は何か?」のテーマでグループ別に討論した。

到達点と今後の課題

日本の入試の課題や英仏の職業と結び付いた高等教育への進学やキャリアに対する価値観の違い等が新たな発見としてあった。一方で、試験の公平性の問題や資格試験の作問の担当者（英国は大学教員が試験関与する割合が拡大している）、日本の高校教育の目標が曖昧化しているのではないかといった課題も見えてきた。時代や社会情勢、科学技術の発展と人々の価値観の変容など、教育現場に与える影響とその変化が求められている昨今、新たな高大接続システムを構築、展望するため、今回の英仏の高大接続事例は、そのシステムや考え方、教育的価値等で学びが多かったと考える。

試験的に対面開催を実施した。当日の欠席者が多かったが、参加者からは好反応であり、対面での意見共有や学びの深さにつながったと考えられる。



スライド 1

事例報告1
イギリスの高大接続システムと
その公平性をめぐる論議

九州大学人間環境学研究院教育学部門・准教授
花井 渉

2022年12月3日(土)
大学コンソーシアム京都 高大連携教育フォーラム【第2部】特別分科会企画

九州大学

スライド 2

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる論議 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 1

本報告の概要

- ① 高大接続の背景
イギリスの大学入学者選抜の変遷と伝統的な学力観
イギリスの高大接続システム(大学入学プロセス)の特質と課題
- ② 公平なアドミッションシステムの構築へ向けた改革動向
シュワルツ報告による公平なアドミッションの原則
「資格取得後のアドミッション」(PQA)システム導入の提案
- ③ PQAシステム導入によって期待される効果
PQAをめぐるその後の展開
日本の大学入試の文脈への示唆

スライド 3

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる論議 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 2

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

イギリスには大学入試は、オックスブリッジでの面接試験を除き、
ほぼ存在しない

イギリスでは、後期中等教育の修了段階に受ける資格試験の成績
が大学入学資格となる ⇒ 後期中等教育修了資格試験が重要

イギリスの資格試験制度では、1951年にGCE-Aレベルが導入され
て以降、その資格試験の修了が、大学入学のための「黄金のスタン
ダード」として広く認知され、社会的地位を確立

⇒現在も大学入学資格として、最も一般的な資格試験

スライド 4

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる論議 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 3

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

ALレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験
制度改革: ALレベルの特質

- 早期の専門化(3科目に限定される学習)
- エリート偏重
- 学習内容の幅(breadth)と深さ(depth)(文理のバランス)
- コア学習(教科横断的な学習)の欠如
- 大学入学者選抜では、ALレベル取得者の選抜を優先的に行っていた
- 「アカデミック-職業ディバイド」

その後、資格試験制度やALレベル改革が繰り返され、階層や出身校に左右され
ない公平な高等教育進学機会の提供が目指されてきた

スライド 5

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる論議 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 4

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

ALレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験
制度改革

クラウザー報告(1959年) vs オックスフォード報告(1960年)

前者: 早期の専門化を前提とする改革
後者: 後にIB機構の初代代表となるピーターソンを代表とする研究チーム
による国際的なシックス・フォーム構想

「論文」、「時事問題」、「一般知識」、「英語の効用」等の学際的な科目の導
入を提案

2000年: デアリング報告の勧告に基づく「カリキュラム2000改革」
2003年: トムリンソン報告(14-19ディプロマ)

⇒いずれも、アカデミック/職業教育に関わらず、共通のコア学習の導入を
提案: 「統合的な資格」(unified qualifications)

スライド 6

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる論議 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 5

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

ALレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験
制度改革

⇒しかし、これまでの改革の多くが、ALレベルのステークホルダーである大
学、資格付与団体や学校・カレッジからの批判や反発を受け、実現されず
に廃案になったり、改革後に元の制度に戻されてきた

⇒「バカロレアは外国のものだ」という考えが根強く残っていた

⇒国際バカロレア(IB)は、改革の参考にはされるものの、その位置づけは
周知的

スライド7

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 6

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

2002年:Aレベル・スキャンダルや成績インフレ問題
Aレベルの質の低下批判が社会全体に広がることになる

2006年:ブレア労働党政権(当時)によるIB拡大政策

IBは、周縁的な資格からイギリスのアカデミックな資格の新たな選択肢となり、Aレベルの代替資格として中心的な資格へと変化

Aレベルが長年抱えてきた課題を解決し、統合的な資格試験制度構築のモデルとして期待されるようになった

スライド8

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 7

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

しかし、IBはその後批判を受け、減少することになる

2010年:キャメロン保守党政権(当時)による財政緊縮策

要因の一つ:
資格・カリキュラムの「柔軟性」(flexibility)の捉え方の違い
⇒イギリスでは、資格によって科目数や学習の範囲が異なっており、科目選択の自由がある点で柔軟性が高いと認識されている

イギリスの文脈では、IBの「6科目3要件」という固定化された資格の取得要件は、柔軟性が低い資格として認識された

スライド9

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 8

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

イギリス国内におけるIB認定校の減少の一方で、イギリス独自の「バカロレア型資格」の開発導入が一時的急増

例:アドバンスト・バカロレア(ABacc): Aレベルの3科目+IBの「課題論文」と「社会奉仕活動」を組み込んだ資格

バカロレア型資格の特徴
「既存の伝統的な資格」(AレベルやBTEC等)+「共通のコア学習」(問題発見型学習、社会奉仕活動、課題論文等)
⇒伝統的な資格を変えることなく、コア学習を追加することで、新たな能力・スキルの育成が図られている

こうして、イギリスの高大接続システムでは、Aレベル優位のシステム(ソフトスキルよりも学力を重視するシステム)が維持され続けてきた

スライド10

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 9

イギリスの高大接続システム(大学入学プロセス)の特質と課題

大学入学プロセス

スライド11

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 10

イギリスの高大接続システム(大学入学プロセス)の特質と課題

- 大学入学資格の「黄金のスタンダード」(the gold standard)としてのGCE-Aレベル:
1951年に開発・導入されて以降、大学進学を目指すほとんどの生徒が受験する後期中等教育修了資格試験
- 多くの生徒は、大学側から提示される入学要件(entry requirement)に合わせた3科目を受験する
- Aレベルの成績は、A*、A、B、C、D及びEの6段階評価
- Aレベルは、主に3つの資格付与団体(民間やチャリティー団体)によって実施されている(Pearson Edexcel、AQA、OCR)
- 外部の第三者による後期中等教育修了資格試験
⇒公平性の担保
- Aレベルは、3科目に絞った、学力重視の試験
⇒公平な試験制度

スライド12

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 九州大学 11

イギリスの高大接続システム(大学入学プロセス)の特質と課題

GCE-Aレベル:学力重視の試験
ただし、資格の組み合わせには自由度があり、柔軟なシステム

Aレベルは、外部の第三者による後期中等教育修了資格試験

外部資格試験の前に、「予測される成績」(predicted grade)に基づいて出願

実際の資格試験を受験する6~9ヶ月前に、高校教員による評価を基に「予測される成績」が出される(カリキュラムの半分ほどしか終わっていない段階)

UCAS(2019)の分析によれば、「予測される成績」は正確に生徒の学力を示すものではなく、その妥当性の問題が指摘されている
生徒は、実際の成績が出る前に、不確かかつ限られた情報を基に進路選択をしなければならず、入学後のミスマッチや中退へとつながる要因となっている

スライド 13

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 12

イギリスの高大接続システム(大学入学プロセス)の特質と課題

社会的に不利な生徒が本来の成績よりも低い入学要件の大学に進学しており、卒業後の進路(就職先)や社会移動の制限にもつながっている(Nuffield Foundation Report (2019))

「無条件合格」や「条件付き合格」の悪用や「疑わしいインセンティブに基づく売り込みや誘導」
⇒別のコースであれば「無条件合格」にする等の提案
⇒奨学金を提示する(財政的な誘導)

学生局(Office for Students)によって大学への警告が出されている(BBC News: 11/29/2018, The Guardian, BBC News: 9/19/2019)

ウィリアムソン教育大臣(当時)は、改革を通じて「不公平感を取り除く」と述べている
現行のpredicted gradeによる選抜で不利益を被っている生徒を救済する
⇒大学入学者選抜における公平性・公正性のあり方が注目された

スライド 14

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 13

シュワルツ報告による公平なアドミSSIONの原則

2004年9月:「高等教育への公平なアドミSSION:グッド・プラクティスのすすめ」(‘Fair admission to higher education: recommendations for good practice’, 通称: シュワルツ報告)

原則1: 公平なアドミSSION・システムは、透明性が確保される必要がある
原則2: 公平なアドミSSION・システムは、各高等教育機関が志願者の学業成績と潜在能力の評価を通じて選抜される必要がある
原則3: 公平なアドミSSION・システムは、信頼性と妥当性の高い評価方法を開発する必要がある
原則4: 公平なアドミSSION・システムは、志願者にとっての障壁を最小限にする必要がある
原則5: 公平なアドミSSION・システムは、すべて専門家によって行なわれる必要がある
必要があり、適切な組織構造とプロセスを基盤とするものでなければならない

シュワルツ報告が公表されて以降、イギリスの多くの大学では、中央アドミSSION・オフィスが設置され、大学全体のアドミSSION業務の統合がなされた

スライド 15

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 14

シュワルツ報告による公平なアドミSSIONの原則

2020年: イギリス大学協会(Universities UK)は、2004年に公表されたシュワルツ報告の再検討を目的として、「公平なアドミSSION・レビュー報告」(Fair Admissions Review)を公表

大学アドミSSIONにおける「公平性」と「透明性」を確保するための8つの提言

1. シュワルツ報告における公平性や透明性に関する一連の提言から今回のレビューを通じて更新されたアドミSSIONの原則を遵守すること
2. 志願者の進学意欲を制限したり、コースの選択に悪影響を与えたりすることなく、アドミSSIONとオファーが学生の最善の利益のために行われるようにすること
3. 「社会・経済的等背景を考慮したアドミSSION」(contextual admission)を推進する上での透明性の向上を含め、アドミSSIONの実践が、高等教育へのアクセスと参加の不公平に確実に対処すること
4. 志願者のアスピレーションを高める支援のための情報とガイダンスの透明性のレベルを改善すること

スライド 16

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 15

シュワルツ報告による公平なアドミSSIONの原則

2020年: イギリス大学協会(Universities UK)は、2004年に公表されたシュワルツ報告の再検討を目的として、「公平なアドミSSION・レビュー報告」(Fair Admissions Review)を公表

大学アドミSSIONにおける「公平性」と「透明性」を確保するための8つの提言

5. 大学・カレッジ入学サービス機構(UCAS)は、アドミSSIONの公平性と透明性を向上させるために、一連の計画された改革を進める必要がある
6. 政府は、アドミSSIONの公平性と透明性をサポートしなければならない。
7. 高等教育セクターは、アドミSSIONに関わる主要課題と批判を特定し、対処するために、より積極的なアプローチをとる必要がある
8. 志願者は、試験・評価の結果が分かるまでオファーを受け取らない、「資格取得後のアドミSSION」(PQA)モデルに基づく改革された大学入学システムをさらに検討する必要がある

スライド 17

事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022 16

「資格取得後のアドミSSION」(PQA)システム導入の提案

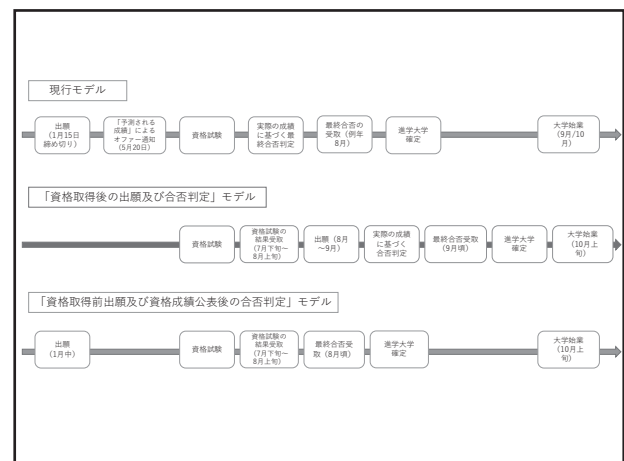
こうした現行の出願システムの課題を背景にPQA導入に向けた全国規模のコンサルテーションが実施された
コンサルテーション期間: 2021年1月21日～5月13日
2つのPQAモデルの提案がなされた

モデル①: 「資格取得後の出願及び可否判定」(post-qualification applications and offers)

モデル②: 「資格取得前出願及び資格成績公表後の可否判定」(pre-qualification application with post-qualification offers and decisions)

どちらのモデルも資格試験の結果に基づく最終可否判定が行われる

スライド 18



スライド 19


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
18

PQAシステム導入によって期待される効果

高等教育へのアクセス拡大

社会的に不利な状況にある生徒が過小評価されることなく、実際の成績に基づいて出願することができ、アスピレーションや社会移動の向上へとつながることが期待される

進路選択の在り方

実際の成績によって自分の学力レベルに見合った大学へ出願することができる⇒ミスマッチの低減

一方で、モデル①では成績が出てから出願までの期間が短く、適切な情報収集ができるのかは、進路指導やガイダンスに頼らざるを得ない

スライド 20


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
19

PQAシステム導入によって期待される効果

大学入学選抜の多様化への対応

モデル①:「資格取得後の出願及び合否判定」
⇒受験生＝実際の成績による出願と合否判定
⇒大学＝合否判定の時間が短く、事前にどの程度の入学希望者がいるのかを確認できない

モデル②:「資格取得前出願及び資格成績公表後の合否判定」
⇒資格試験以前に出願するため、どの程度の入学希望者がいるのかを早めに知ることができ、
最終合否判定が早く出せる(8月頃)
⇒資格試験の成績公表まで、他の出願書類の検討が可能(学力以外の学習成果の多面的・総合的な評価＝多様な学生の受け入れ)

スライド 21


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
20

PQAをめぐるその後の展開

2022年2月24日:PQAのコンサルテーションの結果公表

その結果、今回の諮問の結果、教育省(DfE)は、PQAシステムの導入を断念することを決定

今回のレスポンスで示された主な理由や懸念

- ・資格試験の結果を従来よりも早く出さねければなくなり、試験の評価に十分な時間を確保することができない(時間の確保)
- ・入学許可の決定プロセスの透明性を高める必要がある(透明性の向上)
- ・制度全体への影響が大きいため、慎重な検討が必要(制度改革の影響への懸念)

⇒制度改革よりも、今は「教育の立て直し」(educational recovery)及び「試験の立て直し」(exam recovery)が必要

スライド 22


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
21

PQAをめぐるその後の展開

引き続き、大学・カレッジ入学サービス機構(UCAS)とともに、
①システム全体の透明性の向上
②「無条件合格」(unconditional offer)の利用を制限
③多様な背景をもつ志願者のための公平性を確保するために、「志望理由書」(Personal Statement)の改善・見直しを進めていく

PQAシステムの導入は断念＝現行の「予測される成績」(Predicted Grade)による出願システムを維持することになった
⇒資格試験の日程や出願手続きの改善は、現時点では行なわれないことになった

スライド 23


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
22

まとめ:日本の大学入試の文脈への示唆

- ・採点期間について
イギリスでは、PQAシステムの導入の議論の中で、最低1ヶ月(最大3ヶ月)の採点期間が確保されている(現行のシステムで2ヶ月)
- 一方、日本では大学共通テストの採点期間は1週間程度、各大学での一般選抜においても約1週間と、非常に短期間での採点と合否判定が求められている
- 調査書や小論文を始めとする記述式問題の採点を含む、多面的・総合的な評価には、一定の採点期間の確保が必要
- ・シュワルツ報告の公平なアドミSSIONの原則5:
「公平なアドミSSION・システムは、すべて専門家によって行なわれる必要があり、適切な組織構造とプロセスを基盤とするものでなければならない」
- 専門的な知識をもったアドミSSION・オフィサーの育成と調査書や記述式問題の評価基準や評価方法の開発が求められる

スライド 24


事例報告1 イギリスの高大接続システムとその公平性をめぐる議論 Wataru Hanai, Dec. 3, 2022
23

ご清聴ありがとうございました。

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門・准教授
花井 渉
hanai.wataru.098@m.kyushu-u.ac.jp

九州大学

スライド 1

第20回高大連携教育フォーラム 第二部特別分科会
2022年12月3日

フランスの高大接続システムと接続評価

細尾萌子（立命館大学）
hosoo@fc.ritsumei.ac.jp

1

スライド 2

○問題意識（高校生時代）

- ・なぜ大学入試のための「受験勉強」をしないといけないの？
- ・ふだんの勉強をがんばるだけではなぜだめなの？
- ・「受験勉強」って意味あるの？

2

スライド 3

- 同志社高校：教科書をなぞるだけではない構造化された学び
 - ・年号だけではなくて時代の特徴を全体的に捉える歴史の授業
- ⇒当時の大学入試（とくにセンター試験）では評価されない
- 授業中に内職して受験勉強。教科書全頁丸覚え

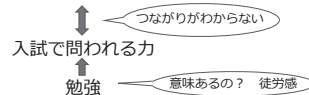
3

スライド 4

○受験勉強の報われなさ

- ・大学のレポートや発表は、受験勉強で覚えた知識だけではできない（むしろ、ほとんど使えなかった）

社会で必要とされる力
大学で必要とされる力



4

スライド 5

○日本の入試は妥当なのか？

- ・大学入試は高校で学ぶべきことを評価しているのか
 - ・バラバラの知識を問うだけではなくて、知識をつなげる力も問うべきなのは
- ⇒妥当性の問題：評価すべきことを評価しているか

5

スライド 6

○知識をつなげる力をなぜ入試で問えない？

- ・信頼性（誰がいつ評価しても同じ結果になるか）を重視
公平性のために、100%の信頼性を求める文化。
 - ・知識をつないで歴史の全体像を描けるかを問う試験では、信頼性は担保できない。評価のばらつきは不可避。それは不公平！
- 客観テスト（選択肢問題など）
細かな知識の習得度を問う試験

6

スライド7

○フランスの高校生は塾に行かない

- ・各大学の入試はない（志願者の振分はある）。
- ・高校終了時のバカロレア試験に合格すれば、基本的にどの大学にも入学できる。試験は論述中心。
- ・高校の授業をまじめに受けていれば合格できるので塾はない

7

スライド8

・ふだんの勉強＝受験勉強なら、日本よりも安心して勉強できるのでは？（妥当性の問題を解決？）

・論述試験で評価できるの？（信頼性は？）

・なんでこんな制度が成り立っているの？

⇒フランスのバカロレア試験への関心
（国際バカロレアIBとは無関係なので注意）

8

スライド9

（1）バカロレア試験制度

- ・6歳で就学する5年制の小学校、4年制の中学校、3年制の高校
- ・高校は、普通教育中心の普通科、職業教育中心の職業科、その中間的性格の技術科の三つ
- ・バカロレア試験は、高校の各科の教育内容に対応して実施（普通科→普通バカロレア試験、技術科→技術バカロレア試験、職業科→職業バカロレア試験）
- ・どのバカロレアを取得しても無選抜で大学に入学できるが、入学者の多くは普通バカロレア取得者（比率は普通：技術：職業が約5：2：3）

9

スライド10

・大学はすべて国立。高等教育の学生の約5割。学士課程は3年

・バカロレア試験に合格しないと入れないので大学生は最低限の学力を身につけている。ただ、2021年の合格率は93.7%

・大学間に細かい序列はない（すべての職業に資格が必要な資格社会で、どの大学で取得した学位も価値は同じだから）

10

スライド11

・バカロレア試験の評定の60%は全国一斉の試験（フランス語・筆記と口述、哲学・筆記、高校で履修した専門科目2科目・筆記と口述（一部科目は実技もあり））

・残りの40%は高校2年・3年での平常点評価（試験で受験した科目を除く必修教科と専門科目と選択科目の平均点）

←継続的な学習を促すため

11

スライド12

（2）評価の妥当性をどう確保しているか

・多様なレベルの高校の教員を中心に、大学教員と協力して作問。
→平均的な生徒に期待できるレベルの、高校で学習した内容の習得度を評価する問題をつくるため

・1808年の試験創設当初は大学教員が作問していたが、高校の教育内容の範囲を超える知識を問う問題

・徐々に高校教員が作問に参加するように

12

スライド 13

バカロレア試験問題の例（2015年）

歴史・地理：月面着陸の写真とベトナム戦争反戦歌の歌詞という「二つの資料を分析し、1960年代末にアメリカが世界規模の大国になったことを示せ。この大国は、二つの資料ではどのように描かれているか」

→導入（問題提起）・展開1（アメリカの強さ：軍事・経済のハード・パワー）・展開2（強さ：科学技術のソフト・パワー）・展開3（弱さ：カウンター・カルチャーなど異議）・結論

13

スライド 14

バカロレア試験問題の例

英語：（都市化の影響を懸念するエディとベック二人の対話文について）「エディは結局、ベックと話すことに決めた。マンハッタン の未来に関する彼らの会話文を書きなさい」

数学：すべての自然数 n について、なぜ $u_{n+1}=0.75u_n+3000$ になるかを説明せよ。

物理・化学：この加水分解で使われた酸の役割について仮説を立てよ。そして、この仮説を検証するための簡単な実験を提案せよ。

14

スライド 15

（2）評価の妥当性をどう確保しているか

・バカロレア試験では、資料を分析して問いや仮説を立てる力、資料からとりだした情報を比較・関連づけてまとめる力、それを既習の知識と結びつける力、それらを論理構成が一貫した文章で書く力が問われている。

15

スライド 16

・バカロレア試験における論述の型は大学の学習の基礎。

・実際、バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高くなる。

・2016年大学入学者が規定の3年で修了する割合
バカロレア試験の点数が20点満点中10点以上12点未満・追試合格者だと8.3%だが、16点以上だと67.7%

16

スライド 17

○市民として育みたい力に向けた高大接続

社会で必要とされる力
大学で必要とされる力

↑
つながってる

バカロレア試験で問われる力

↑
小中高の勉強

試験みたいに論述・議論できる
大人が評価される

バカロレア試験で問われる力
を段階的に育成

17

スライド 18

（3）論述試験で接続ができる前提（信頼性の問題をどう解決？）

①作問・採点を行う高校教員の専門性への社会的信頼

・中等教員採用試験は論述中心
・高校教員は日々の実践でも論述の添削

②採点の観点・水準を調整するモデレーション

・採点規準の共有（答案に期待する要素、加点・減点する項目）
・採点結果の統計的調整

③バカロレア試験は資格試験で、点数が入学者選抜に使われることは基本的にはないので、一点の違いにやきもちしない。

→100%の信頼性はなく、完全な公平ではないけど、測られるべきものが測られているし、結果は正当として受入れ（採点へのクレームは多くない。論述試験がなくなったこともなし）

18

スライド 19

(4) 日本への示唆

・ 論述試験の採点者（高校教員の位置づけ）、高大接続の試験の性格、公平性についての考え方は日仏で大きく違う

→その議論抜きに単に論述試験だけ入試に導入しても無理

19

スライド 20

・ そもそも、論述試験＝思考力を問える試験というわけではない
例）バカロレア試験の歴史・地理の「作文」は、知識の暗記を問う面が強い。
・ 作文の型は中学校から6年間練習しているので難しくない。
・ 出題される作文は、指導要領の章タイトルと同じか似た題のもの
→作文の型のなかに、授業で習った知識をはめこむだけで合格点

「作文を書くには思考しなくてもよい」（イレー・ド・シャルドネ
高校のルサージュ教員、2018年2月7日に同高校でインタビュー）

20

スライド 21

国レベル・各大学でこれからやるべきこと

①将来の日本社会に向けてどういう人を育てたいかの議論

②①の準備学力として、大学新入生にどんな知識や思考力・表現力を求めるべきか、の議論

③ある程度の信頼性を担保しつつ、②を測れる試験方法の開発

* 入試に論述を導入する方法論だけ考えてもだめでは

21

スライド 22

○出典

・ 細尾萌子・夏目達也・大場淳編著『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』ミネルヴァ書房、2020年。

・ Ministère de l'Éducation nationale(2022), *Repères et références statistiques sur les enseignements, la formation et la recherche*.
(統計の出典はすべてこの文書)

22